

## ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(18)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月29日に行われたドルトムント公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

---

Ruhr Nachrichten  
March 9, 2020  
Julia Goß

### アジアの秩序がアルゼンチンの情熱を制御

#### 東京の交響楽団の公演前に観客は不安

新型コロナウイルスによる不安は、土曜日のドルトムントのコンツェルトハウスにおける東京のNHK交響楽団の公演前も大きかった。アジアの交響楽団による公演が開催されるのかという多くの観客からの問い合わせが開始前から寄せられた。公演は開催され、チケットは完売。87名のアジア人から成るオーケストラにヨーロッパ人はただ一人。

日本人は、ヨーロッパと米国のオーケストラで活躍している。学生時代にヨーロッパの音楽文化を学ぶために留学する日本人も多い。そして、彼らの演奏は技術面でライバルに勝っているためそのまま留学先に留まる。それらの事を放送局NHKにちなんで名付けられ、コンツェルトハウス・ドルトムントの支配人のラファエル・フォン・ヘンスブレヒの生地からやってきたオーケストラに聴きとることができる。

同オーケストラの演奏は完璧であり、まれにしか聴くことのできない見事さであった。ただ、前半は艶やかに磨き上げた響きを感じさせるが、深みは乏しい。シューマンの《チェロ協奏曲》では、オーケストラによる表現と音楽家の情熱が欠けていた。ソル・ガベッタにはそれが感じられたが、彼女の演奏をもってしてもオーケストラのエモーションを引き出すことができなかった。アルゼンチン出身で38歳の彼女の音色は密で細やかだ。アンコール曲はそれに完璧なほど相応しいペテリス・ヴァスクスの《ドルチッシモ》で、ここで彼女はあたかも蝶が舞うように音を飛翔させていた。

2015年以来、首席指揮者を務めるのはパーヴォ・ヤルヴィである。同オーケストラとは相当深くブルックナーを追求したと思われる。《交響曲 第7番》でオーケストラの演奏は変貌したかのようだった。ここでもクレッシェンドは何れも正確に練習したという印象で自然な

流れが感じられなかったが、演奏には遥かに厚みのある力と情感があった。であればこそ、強力な表現の性格を帯びた作品であるシベリウスの《悲しきワルツ》をアンコールに選ぶ冒険もできたのであろう。